



**札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor***

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	物事の本質をとらえるために ~ 構造構成主義の視座 ~
Author(s)	西條, 剛夫
Citation	札幌保健科学雑誌, 第 3 号:1-7
Issue Date	2014 年 3 月
DOI	10.15114/sjhs.3.1
Doc URL	<a href="http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6069">http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6069</a>
Type	Technical Report
Additional Information	
File Information	n2186621X31.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

総説

## 物事の本質をとらえるために ～構造構成主義の視座～

西條剛夫

早稲田大学大学院商学研究科専門職学位課程(MBA)専任講師  
「ふんばろう東日本支援プロジェクト」代表

Perceiving the true essence of things from viewpoints of Structural-constructivism

Takeo SAIJO

Waseda Business School, Graduate School of Commerce, Faculty of Commerce, Waseda University  
Fumbaro Project of Assistance of East Japan

Sapporo J. Health Sci. 3:1-7(2014)

### I. はじめに

私は発達心理学を学び、「お母さんと子どもの抱っこ」の研究で博士号(人間科学)を取得し、『母子間の抱きの人間科学的研究』(北大路書房)として上梓し、子ども向けの絵本を出版した。その後、『構造構成主義とは何か』(北大路書房)で信念対立を克服するための新たな方法を導き出す原理・考え方である「構造構成主義」を体系的に提示し、この考えは医療界・教育界を中心に100以上の領域で導入・応用されている。

これまで、私は学問の世界で活動を行っていたが、2011年に我が国を襲った東日本大震災をきっかけに、ボランティア組織である「ふんばろう東日本支援プロジェクト」を立ち上げ、この活動は3,000人のメンバーからなる日本最大級のボランティア組織プロジェクトへと成長した(『人を助けるすんごい仕組み』(ダイヤモンド社)参照)。

「ふんばろう東日本支援プロジェクト」がどのような支援を行ってきたのか、そして人間科学の原理として体系化した「構造構成主義」の観点からボランティア活動の活性化や、研究として原理的に備えなければならない条件、そして組織マネジメントに必要な原理について話したい。

### II. 「方法の原理」と「ふんばろう東日本支援プロジェクト」

私は仙台出身で、東日本大震災の津波で親戚を亡くした。両親が仙台にいて、現地に物資を届けに行ったことがきっかけで被災者支援プロジェクトを立ち上げることになった。



津波から3週間程経過した被災地では、大きな避難所には救援物資が山積みになっているにもかかわらず、小さな避難所や個人には物資が行き渡っていない状況であった。

東日本大震災のエネルギーは阪神淡路大震災の1,000倍に相当するもので、東京～大阪間の距離に匹敵する400kmの沿岸が壊滅している状態であった。被害の状況を目の当たりにし、最初に立ち上げたのが「物資支援プロジェクト」であった。個人の要望に基づいた物資を全国から直接被災者へ届ける仕組み作りを行い、最終的にこのプロジェクトは、3,000箇所以上の避難所に15万5,000品目の物資支援を実現した。その後、数十のプロジェクトを立ち上げ、現在も支援活動を継続しているところである。

経営やボランティア経験のない私が被災者支援プロジェクトを成功させ、これほどまでに大きな組織を作ることができた理由として、「構造構成主義」という、いかなる状況でも適用可能な原理・考え方を身に付けていたことがある。この原理に基づき、未経験の現場においてもその都度実効性の高い「方法」を打ち出すことが可能であったので

ある。今回の被災者支援プロジェクトの活動にあたり、有効性を発揮した理路は「構造構成主義」から導き出した「方法の原理」であった。

「方法」とは「特定の状況において、特定の目的を達成する手段」であり、この定義はあらゆる「方法」と呼ばれるものに共通する「方法の原理」である。したがって、どんな場面においても「方法の原理」に照らし、その都度「状況」を見ながら「目的」を実現させるための有効な方法を打ち出していけばよいのである。「物資支援プロジェクト」では、小さな避難所などの被災者へも救援物資を届けるために、ホームページとTwitterを利用することで日本中の大きな力を結集させ、「いつでもどこでも誰でも、必要としている人に必要なだけの物資を直接送ることができる」仕組みを作ったのだ。こうして「方法の原理」により、被災地の状況に対応する新たな支援方法を次々と作り出していくことができたのである。

### Ⅲ. 「構造構成主義」における 本質観取について

「方法の原理」を導き出した「構造構成主義」というのは、物事の本質（エッセンス）を踏まえた、しなやかに生きるために役立つ考え方であると言える。そこで、次に物事の本質を捉えるための方法である「本質観取」について紹介する。

「本質観取」とは、例えば、「愛」に共通する、その言葉をその言葉たらしめている最も重要なポイントを言い当てる営みである。例えば「愛とは何か、どんなイメージか」という問いに対してあげられる「共感」、「思いやること」、「あたたかな気持ち」、「慈愛」、「許すこと」、「感謝し合うこと」などの言葉の中に、共通することは何かを考えていくのである。そもそも「愛」というのは「言葉」であるから、これは言葉の内実、本質を言い当てていく言語ゲームと言える。

ソシュールの『一般言語学講義』で言われているように、通常、言葉は定義としては習わない。「犬とは何か」と聞かれて答えられないのは、犬を定義から教わっている人はいないからである。一般的に言葉は、幼いときに母親から「あれはワンワン（犬）」、「あれはニャンニャン（猫）」といった形で教わり、その差異で分類され認識されていくものであるから、関心の高さに比例して名前は細分化されていく。漁師にとっては魚に、エスキモーにとっては雪に多くの名前が付いているのは、彼らにとって重要なものが細分化され名前が付いているということだ。つまり、興味・関心がないものには大きなカテゴリーしかなく、関心の高い事象ほど（専門領域であるほど）名前は細かく分類されていくことになる。

言葉というのはやりとりの中で、「どうやらこの言葉はこんな意味で使っているんだな」ということがわかってい

くものだ。実際は、一人一人の頭の中で「愛」という言葉の同一性や内実は違っていても、そこには何らかの共通性があるので会話は成立する。会話が成立しない場合、例えば目に見えるものについてであれば「この人は犬のことを猫と言っているんだな」ということが明確になるが、「愛」などであれば、認識のズレに簡単には気づけない。ただ、会話が成立しているということは、何らかの共通性があるということであるから、その共通性を言い当てようというのが「本質観取」である。その言葉はどのようなイメージで、どのようなときに、何のために使われるのか、また、近い言葉との違い、反対の言葉との違いは何かということを考え、その最も重要なポイントである「本質」を捉えていくのである。

先日、「論理」について本質観取を行った。「論理的に考えなさい」、「その話は非論理的だ」と言うが、「論理」という言葉はわかりそうでなかなか難しい。受講者に聞くと「理屈」「堅いイメージ」「人と共有できる納得できる考え」「言葉と言葉のつながり」といったことが出てきた。「筋道を立てて物事を考える考え方で、その方法を使えば誰でも同じ回答にたどりつく」など、広く了解されそうな答えも出てきた。私なりの答えをいえば、「論理」とは、「丁寧に考えて行けば、同形の（同じような）考えにたどりつくことができる、高い追認可能性のある言葉と言葉のつながり方」であると言える。こうして、論理の本質がわかると、論理的な人というのは「高い追認可能性があり、その文章を読んだ人が納得できるような言葉のつながり方ができる人」であり、逆に、非論理的な人というのは、「相手を納得させる言葉のつながりが飛んでしまっていて、なぜ、そのようにつながっていくのかがわからない話をする人」ということになる。しかしこれらを裏返すと「論理的」というのは、それ以上の意味はないということにもなる。追認可能性が高く、どんなに論理的に話が通っていても「その人の話は聞きたくない」「あなたの言う事は聞きません」ということだってある。どんなに追認可能性が高い内容でも、感情の壁に阻まれて読まなければ何の意味もなく、「論理」の限界というものもよくわかってくる。

では、「理論」とは何か。すべての「理論」は言葉でできている。つまり物事を説明するために、言葉によってつくられたツールが「理論」であると言える。例えば、相対性理論の式も  $E=mc^2$ 、すなわち「光速の二乗と質量を掛け合わせたものがエネルギーである」という言葉でできている。宗教の「人生に起こるすべての出来事には意味がある」という「理論」もすべて言葉でできていることから、あらゆる「理論」とは現象を説明するために人間が言葉でこしらえたツールであると言える。

「科学」とは何か。「それは科学的研究ではない」「いやそっちの方が非科学的だ」といった「科学」という言葉を契機とした対立があるが、「科学」とは何かということは「科学論」や「科学哲学」の世界でも明確な答えは得られ

ていなかったという事実がある。しかし考えてみると、「科学」とは何かがわからないのに、なぜ科学的か否かという議論ができるのかということとは不思議である。

なぜ、このようなことになったかと言うと、自分が習い覚えた方法、例えば、数量化するのが科学であると習うと、それが科学だと思ふようになり、実験をするのが、あるいは、アンケート調査を行い統計をとるのが科学であると習うと、それが科学であると思ふようになってしまうからである。しかし、数値化やグラフにすることは科学の本質ではない。「科学」とは、池田清彦先生の著書『構造主義科学論の冒険』（講談社）の中で述べられているように、「予測と制御に役立つ構造の追求が科学である」と言える。

地震学は東日本大震災後に開催された地震学会のシンポジウムで、自ら敗北宣言をした。なぜなら、これだけの巨大地震を全く予測することができなかったからである。全く予測ができないということは構造がとらえられていないということで、科学として地震学は上手くいっていないということになるのだ。

では、「科学的研究」とは何なのか。これは質的研究にも言えるが、現象の予測と制御に役立つ構造化も大事であるが、必ず、構造化に至るまでの過程を開示するということをやらなければいけない。

被災地では、放射線を正しく計測できるよう「ガイガーカウンタープロジェクト」を立ち上げた。ブログやTwitterなどでは、ガイガーカウンター（放射線量計）で測定し、これだけ高い数値が出たなどとやっているが、放射線は体重と違い非常にランダムに変動するのだ。短い時間でものすごく高くなる時もあるれば、低くなる時もある。そこで、高性能のガイガーカウンターを正しい測定方法や知識とともに無料で貸し出すというのがこのプロジェクトである。測定値の表示だけだと、その数値がどのような条件下で、どのような手続きにおいて出されたものなのかという過程を開示していないから、批判や吟味のしようがないのだ。

一方で論文には、問題、目的、方法、結果、考察が設定されいて、研究とは基本的に構造化に至るまでの諸条件を開示するという条件を備えている。特に、論文には「方法」が設定されている。これは実は一般化の問題にかかわることでもある。では「一般化」とは何か。例えば、2010年の夏に実施した原発に関する全国意識調査の結果を、2013年の現在に一般化することはできない。論文の中でいくら一般化ができていても、読み手にとっては、「2010年の夏の調査以降、社会は変わってしまったから現状にはあてはまらない」となる。なぜ、読み手がそのような一般化ができるかと言うと、論文には方法の部分、構造化にいたる部分が明記されているからである。逆にいえば、構造化に至るまでの条件はきちんと開示しておかないと、批判的に吟味する可能性がなくなってしまう、それでは研究とは言えず、その辺のブログと同じレベルのものになってしまう

のである。

事例研究に対してよく言われるのは、「その事例はどこまで一般化できるのか？」という質問であり、批判である。その事例は、どのような条件で出されたものなのかが書いてあれば、読み手は「この事例は目の前にいる患者さんに似ているからあてはまる」とか、あてはまらないといった判断をすることができる。つまり構造化に至る（結果を提示するに至る）諸条件を開示することが、類推に基づく一般化可能性をも担保することになるのである。そうした研究として最低限備えるべき条件をクリアすれば、あとは「方法の原理」に沿って状況（現実的制約）と研究目的に照らして有効な方法を選択すればよい、ということになる。そこには量的研究の方が絶対に正しい、質的研究の方が正しいといった争いは無意味になる。

では質的研究はどういう場合に向いているのか。様々な答え方は可能だが、札幌医科大学の「建学の精神」で唱っている「進取の精神」は—これは早稲田大学と同じである—この進取の精神は意義のある仮説生成的な質的研究を行う際にヒントとなる。たとえば、医療行為が制度等に支えられている以上、〇〇法の施行により医療従事者はどのような体験をしているかといった研究が成立する。法改正自体が新しい事象であるので、新しい仮説を生成する研究の意義がそこには成立するから「質的研究」は有効である。

それでは「愛」とは何かを考えたとき、最も象徴的な場面は、赤ちゃんが寝返りを打とうとしているときに、周りの大人が「がんばれ、がんばれ」と励まし、できたら喜び、できなくても「惜しかったね、またやってみよう」と労うシーンがあげられる。「愛」を象徴するこの場面の本質は「肯定と応援」ということができる。「もっと人を愛しなさい」と言っても相手はどうすればよいかわからないかもしれないが、愛の本質が「肯定と応援」であると言われれば、具体的に実践しやすくなる。

ちなみに、他者の「行為」に対して「肯定と応援」ができるかという観点から「全員を愛せるかどうか」と考えると難しいが、他者を「存在」や「生命」として捉え、「他者の“存在”を肯定して応援すること」が「愛」であると考えると全員を愛することはできる。重要なのは、相手を好きではなくてもいいということで、嫌いであっても、存在そのものを肯定することはできるのである。誰かに腹が立ったときや、「あまりにもこの人は無茶苦茶だな」と思ったときは、「自分も含めて人間誰もが一生懸命生きているんだ」と言い聞かせると、何となく気持ちが落ち着き、「この世に存在しよう」と一生懸命生きているという生命として肯定、応援がしやすくなる。自分自身に対しても同様で、自分に肯定できないところがあるときは、「それでも一生懸命生きているよな」と思うことで肯定できる。他者だけでなく自分に対する「愛」も大切であり、自分の存在を肯定してあげるのはとても大切なことである。

ただし、「肯定と応援」に際しては、健康で強い人に対



してはシンプルな「肯定と応援」でよいが、弱っている人に対して「大丈夫だから、大丈夫だから」と言っても、相手にとっては「どこが？全く大丈夫じゃない」と逆効果になることもある。人間は「理解してもらえていない」と思ったときには肯定されたと感じることはないため、弱っている相手が肯定されたと感じるためには、「共感的理解」がないとうまく行かないのである。

#### IV. 「人間の原理」に沿ったマネジメント

ボランティア組織が他の組織と違うのは、無給であるという点である。仕事の場合は、「行きたくない」という気持ちがあっても、お金をもらっているからすぐに辞めるといことにはならないが、ボランティアは「やる気」がすべてである。「やりたくない」と思えば、翌日から行かなくてもよいわけだから、ボランティア組織は人間の気持ちや本質に沿ったものでないと、すぐに人は離れてしまう。「ふんぼろう東日本支援プロジェクト」において無給で3,000人以上が活動しているのは、このボランティア組織が人間の気持ちや本質に沿っていることが大きいように思われる。病院、大学など、すべての組織を構成しているのは人間であり、ボランティア組織で最も大切な「人間の心に反しない」という原理は、すべての組織や実践で役立つのである。

私は「人間の原理」と呼んでいるが、すべての人間に例外なく共通していることは、「どんな人間も肯定されたいと思っている」ということだ。今回の支援プロジェクトのマネジメントにおいて「人間の原理」は最も活きた原理であった。特にリーダーや、ボランティアをがんばっている人ほど、「なぜ、他の人はがんばらないんだ！」となりがちだ。しかし、すべての人間は「肯定されたい」という思いを持っているから、否定されるとやる気がなくなってしまふ。ボランティアは、やる気がすべてである。否定されると、「自分だって生活や仕事がある中で無償でがんばっているのに、そんなこと言われるならもうやめるよ」と来なくなるのも自然なことである。

被災者支援プロジェクトを立ち上げたとき、私の師匠である池田清彦先生から、次のようなアドバイスを受けた。「ボランティアなんだから、一つでもやってくれたら感謝しないといけない。否定してしまうと内部崩壊することも珍しくない。必ず感謝、そして肯定しなければいけないということを、十分に心がけなければいけない」。直接的なアドバイスをしない池田先生からの初めて受けたこの助言が、組織運営に非常に役に立ったのである。

「感謝」の反対概念は「当たり前」で、人間はつい「やってくれるのが当たり前」になる。親が子どもを育てるのは当たり前、社長が給料を払ってくれるのは社員からすれば当たり前、社長からすれば給料を払っているんだから社員が働くのは当たり前…と、ある意味で否定し合う形になっ

てしまう。そうすると上手く行くものも行かなくなる。

「感謝することは大事である」ということは、誰もが何度も聞いたことがある当たり前のことだ。しかしなぜ、これだけ繰り返されなければいけないのか。それは、「よし、明日から、奥さんがご飯を作ってくれることを当たり前だと思ふことにしよう」というように、故意に当たり前とするのではなく、知らず知らずのうちに当たり前になってしまうからである。ここには、空気を吸えていることに感謝している人はいないだろうし、また、病気になった時には健康に感謝するけれども、すぐに忘れてしまう。つまり、簡単に忘れてしまうからこそ、感謝の気持ちを忘れないようにすることが大事なのである。

人間は誰もが肯定されたいという気持ちを持っている。当然、感謝されたくてボランティアをしているわけではないだろうが、感謝されて嬉しくない人はいない。人は感謝しながら相手を否定することはできないわけで、誰かに感謝しているとき、自分も「ありがたいなあ」という気持ちで満たされ、自分も相手も嬉しい、という二重肯定が生まれる。これが「素晴らしいね」とか「すごいね」という言葉と「感謝」が異なるところで、「感謝」にはすごい力があるのだ。つまり、お互いが感謝の言葉を伝え肯定し合いながら、それがエネルギーとなって気持ちよく活動が進んでいく。これがボランティアに限らず組織運営の理想的なあり方だと考える。

#### V. 人間の原理:すべての人間は肯定されたい

「人間の原理」は、すべての人間をどんな状況でも肯定すべきと言っているわけではない。肯定できないときや、叱らなければいけないときでも、「すべての人間はどんなときでも肯定されたいと思っている」という原理を踏まえた方がいいだろうということだ。それでも叱らなければいけないときには、「人間の原理」を前提に相手の存在を肯定しながら叱るのと、頭ごなしに「お前なんか、やめてしまえっ」と存在否定するのでは全く異なる。医療実践を教える上でも必要なことは、対象者の存在を肯定しながら、どうやって改善してもらおうのかということであろう。

相手に変わってもらわなければいけない、間違った行動を修正しなければいけない時に、人間は肯定された後でないと聞く耳を持たないということがある。いきなり行動の修正を伝えると、相手は否定されたと感じ、伝えた内容は正しいものであったとしても「聞きたくない」となるのだ。つまり、肯定できる部分を肯定し、関係性を築いた上ではじめて相手の行動の修正ができるようになるのである。

自分に対しても同様のことが言える。どんな人でも、「こんなふうになりたい」と思うことがある。ところが、目指した100をいきなり達成できることはふつうない。その時には、一歩でも前に進んだら、自分のことを褒めて肯定しなければいけない。「ちょっとだけでも進んだぞ。こ

の調子でいけばいい」と、どんどん肯定してあげることが必要である。しかし、自分に厳しい人ほど否定していく傾向にある。「本当は100やりたかったけど10しかできなかった…ダメだな」とがんばっている行為を否定するのだ。これは「構造構成主義」でいうところの「負の強化」であり、結果、望んだ行為をしなくなる。これは努力が続かないように自らマネジメントしたことになる。自分を含めて人間は肯定されたいと思っているという「人間の原理」に沿うというのは、ものすごく大切で、肯定されればその行為をどんどんやっけていく。人間はそんなふうにできているのである。

学園ドラマに登場する先生を見ても同じことが言える。よい先生というのは、パターン化していて、必ず生徒の存在を受け止め、肯定した上で行為の部分を修正していく。逆に、悪い先生は、必ず生徒の存在を否定することを言う。大きさに描いてはいるが、「お前らみたいなクズはな…」という言い方をし、よい先生は生徒の存在を守るという図式が描かれる。子ども達は、自分の存在を肯定してくれる先生を信頼していき、生徒は改心していくというパターンが多い。

学園ものに限らず、最近のドラマを見ると、改めて、肯定すること、自己肯定感が大切であると思う。例えば、謝るということは「否定してしまつてごめんなさい」と謝るということで、それは肯定につながる。肯定する力は人間にとって非常に重要なエネルギーになる。さらに、自己肯定感を軸にドラマを見ると面白いものがある。自己肯定感が高い人は、批判的なことを言われても揺れずに受け止めることができる。ドラマティックな展開をさせるため、男性は自己肯定感が低く、女性は自己肯定感が高いということが、特に韓流ドラマに多い。自己肯定感が高いと「ずっと幸せだね」と言ってもらえるが、相手の自己肯定感が低く、不安定ですぐ不安になり、「自分のこと本当は好きじゃないんじゃないか」などと迷うタイプであれば、ドラマとして成り立つところがある。自己肯定感はドラマの軸になっているという見方もできるのだ。

## VI. 信念対立の克服と「価値の原理」

「人間は肯定されたいと思っている」という「人間の原理」は全員にあてはまるが、この原理だけでは超えられない対立がある。たとえば、意見が対立しお互いが「相手の考えが間違っている」と思っているとき、つまり「相手の意見は絶対に聞けない」という状況で相手の意見を肯定することはできない。

「構造構成主義」は、「信念対立を克服するための考え方」であるということが特徴としてあげられる。生産性を高めるための方法論はたくさんあるが、他方で対立や足の引っ張り合いが生じると消耗戦となり、当事者はもちろん、周りで見ている方も疲弊してしまう。一方で、仕事は大変

であっても前に向かって進んで行けるエネルギーは簡単に疲れたり、折れたりしないものである。重要なのは、如何にそのような対立を生じさせないかということだ。あるいは生じた場合にもいかにそれを解消する端緒を開くか、である。

学問の世界、例えば「人間科学」においては「生物学」、「心理学」、「社会学」といった学問間の対立、量的研究と質的研究の対立、質的研究の中にも様々な流派同士の対立がある。また、「心理学」においては方法論の対立に加えて、基礎と臨床の対立などの様々な対立がある。その中には、対立している双方が「言い争うことも時間の無駄だから勝手にすればいい」という相互不干渉状態になったものも多い。ただ、学問の世界では、隣の研究室や対立相手と一切話しをしなくても、それで人の命が奪われることはないが、医療現場や被災者支援のボランティア活動の現場においては、対立の影響が患者さんやクライアント、被災者に及ぶことになるため、「わかりあわなくともよい」と開き直すことは解決策にならない。こうした信念対立に陥らないための考え方・原理が「構造構成主義」であり、信念対立の克服・解消について次のように理論化している。

例えば、被災建築物（震災遺構）を巡る対立では、「被災建築物を見るのはつらいから壊すべき」という人と、「被災建築物を残す事で、後生に津波の恐ろしさを視覚的に伝えるべき。悲劇を繰り返さないためにも被災建築物は未来に残すべき」と言う人がいる。あるいは、原発の再稼働を巡って、日本中で対立が起きている。「再稼働しないと電気が不足し不景気になる」と言う人と、「これだけの悲劇が起こったのに、再稼働なんてとんでもない」という人の対立だ。また、私が立ち上げた「家電プロジェクト」を巡っても対立が生じた。行政の支援が受けられない個人避難宅などに対して、支援格差を埋めるべく、新聞で大々的に告知を載せ、被災者の希望を募り、希望に応じた家電を届けるというこのプロジェクトに対し、当初、現地のスタッフから猛烈な反対が出たのだ。「新聞を利用した申込みは初めてなので、どれだけ申込みが殺到するのか読めないリスクがある」といった内容だった。

こういった対立を解消するのが「価値の原理」の考え方である。「価値の原理」というのはすべての価値にあてはまる。価値は必ず、欲望、目的、関心に照らして判断される。例えば、かわいい動物にしか関心がなければ珍獣に興味は持たないし、反対に、珍獣集めに興味があれば珍獣に価値を見い出すということだ。それでは、関心は何によって生じるのかというと、関心は「契機」から生じる。すなわち何かのきっかけがあって「関心」を持つようになるのだ。これは、「契機相関性」という。きっかけがあり、関心が生じて、あることに価値を見い出し、行動するというステップである。こちらから「これには価値があるので。買ってください」と言って買ってくれるのは家族くらいで、普通は、相手が価値を見い出したものを買うのである。就

職活動の面接も同様で、面接を受けるということは、相手に自分は価値があると認めてもらわなければいけないということであるから、相手側の関心がどこにあるのかを理解しておかなければいけない。相手の関心から外れている場合は、「よいプレゼンテーションをした」と自分が思っている相手にも響くことはない。必ず相手の関心がどこにあるのか、また、関心がないのであれば関心を持ってもらうようなきっかけづくりをする必要があるのだ。

「価値」のステップから「契機相関性」のステップまで遡って見ると、被災建築物を巡る信念対立は解消できる。まず、価値のフィールドで賛成・反対を言ってもわかり合うことはないから、その賛成・反対はどのような関心から生まれてきているのか、その関心は何をきっかけに生じているのかと遡っていくのである。すると、建物を解体すべきという人には「その建物で亡くなった家族がいるため、建物を見ると辛い」ことから解体に賛成していることがわかる。他方、「過去の教訓を忘れたことにより家族を失った」という人からすれば、「未来の命を救う」ことに関心を持つため、解体には反対であり保存すべきであると考えているということがわかる。

その上で、「構造構成主義」の思考プロセスにおいては、価値ではなく、関心のフィールドで両者の両立を目指すのである。賛成と反対という価値の部分は決して両立できないが、関心を両立させることはできるのである。例えば、「建築物を見たくない」人と、「建築物を残して未来への命を残したい」人の両方の関心を両立させるには、「建築物を高い壁で囲う」という方法が考えられる。建築物を高い壁で囲うと、その上に行けば被災建築物を見ることができ、その前を通り過ぎる生活者には壁の内側にある建物は見えないという状況を作ることができるのだ。

さらに、原発を巡る問題においても様々な関心、きっかけを遡っていき、「こういう理由で賛成もしくは反対」ということがわかるだけでも絶対悪といった見方はしなくなる。「こういう理由があるんだな」と一つ一つ理由を潰していき、両方の関心を両立させることはできないものか考えるのだ。そうすると、例えば、「給付金を打ち切られたことで生活に困り、亡くなってしまう人が出ないように、



原発は止めるけれども原発の隣に火力発電所を作り、雇用を確保することはできないだろうか」などと、両立できる可能性が出てくる。「家電プロジェクト」の際は、「なぜ、この人はそんな勢いで反対してくるんだろう」というように、「価値の原理」で遡っていき、理由がわかったので、相手の関心を自分の中に取り込んだ上で、双方が矛盾しないように実施する方法をとった。「こんな風を実施すればあなたの関心も満たせますよね。これでやりましょう」という形で実現することができたのである。

## VII. おわりに

私の言う方法の本質とは「特定の状況において目的を達成する手段」のことである。したがって、絶対に正しい研究方法も、実践方法もない。どのような状況で何をしたいか（目的）によって、方法は変わるのだ。これまではよい実践方法であっても、病院や患者さんの状況が変わった場合は、別の方法がよいということも当然ある。ただ、多くの場合は方法が「自己目的化」してしまい、「何のためにやるのか」という、本来の目的を忘れてしまいがちである。

そうした観点からみれば、ルールは運営をスムーズにするためにあるツールの一つで、絶対に守らなければいけない規範ではない、ということがわかる。最初にルールを設定した人は、運営をスムーズに行うという目的を達成するために「こういうルールがあった方がいい」という理由があって作ったはずだ。ところが、このルールが絶対になってしまい、例えば震災時に各地の行政で起きたように「公平を保つ」という平時の方法にとらわれ、被災者に物資が届かないなどというように、本来の「被災者の生活を支援する」という目的がないがしろにされてしまうのである。

「方法の原理」は「そもそも何のために？」と問い直すことで目的に立ち戻するためのリマインダーとしての機能を持つ。さらに、状況と目的から最適な方法を導き出す「方法の原理」を使えば、前例のないアイデアであっても有効な方法であるという提案ができ、周囲の批判にとらわれずに正当性を担保しながら実行することができるのだ。

日本の多くの組織では「方法の原理」が根付いていないために、経験的に培った方法を踏襲することに偏りがちだ。そのため、本来の目的よりも方法を遵守する「方法の自己目的化」に進みやすい。だから、未曾有の災害や変化の激しい時代や状況にうまく対応できない状況に陥ってしまうのだ。

医療の場合は、医療行為を通して患者さんのQOLをあげるという目的から、決しておれないことが大切である。第一義に方法を遵守することに固執すると、本来の目的からぶれて、「一体、何をやってるんだろう」という結果になりかねない。「病気は治ったが患者は死んだ」と揶揄されるように、正しいとされる手続きに乗っ取っても、患者さんが亡くなってしまったら何にもならない。さらに、

「人の命」と向き合い、支える医療現場においてこそ、様々な状況の変化に対応し柔軟に方法を変える思考や実践が求められており、「構造構成主義」の考え方は有効であると言える。

札幌医科大学の理念にあるとおり、「人間性豊かな医療実践者」というのは、高い技術と柔軟性、しなやかさと人間を肯定・応援できる愛を兼ね備えた医療者のことである。ただ単に優秀であるというのではなく、本当に「人間性豊かな医療実践者」が北海道の地域医療に貢献できる人材になると確信する。

人間は、言葉があること、あるいは、原理として言葉にすることによって、それまで以上に目指す方向性を確固たるものにして強く進んでいけるものである。これからも、より一層自覚的、意識的に素晴らしい「人間性豊かな医療実践者」を育成し、地域医療に、そして多くの患者さんのQOLの向上に貢献し続ける大学であるよう、心から期待したい。

札幌医科大学保健医療学部開設20周年（短期大学部開設30周年）記念講演会「基調講演」より収録  
平成25年6月21日（金）札幌医科大学臨床講堂にて開催